



学校法人日本赤十字学園 赤十字の教育研究推進委員会
赤十字学構築部会

赤十字に関する懇談会 報告書

I はじめに

日本赤十字社（以下、日赤という。）は、1877年に設立された前身である博愛社以来、140年余にわたり、災害救護、国内の医療・福祉活動、看護教育、血液事業等、多様な活動を展開し、日本の医療福祉の発展に大きく寄与してきた。また、同社の長期ビジョン「VISION 日赤 150」では、事業戦略として、社会全体の災害対応能力の向上に向けた学術的・技術的貢献の一環として、140年間の活動を通じて培ってきた学びや知識の体系的整理・分析を掲げている。さらに、学校法人日本赤十字学園（以下、学園という。）の「2040年に向けたグランドデザイン」においても、これまでの赤十字の歴史を振り返り、その活動実績や知見を整理することを通して、未来の赤十字（看護教育等）の発展に寄与することを目的に、赤十字学の構築を目標としている。

赤十字学の検討にあたっては、人道を中核とする「赤十字基本7原則」を基盤とすることはいうまでもない。日本の赤十字活動において、職員が7原則をどのように理解し、人道の理念を実践の場でいかに展開してきたのか、すなわち「赤十字たらしめている活動」とは何かを明らかにする必要がある。また、国民が赤十字活動をどのように捉え、そこにどのような期待を持っているのかといった点も含め、赤十字活動が持つ多様な特性を歴史的背景を踏まえて整理していくことが重要である。

そこで、赤十字活動の実践からその特性を捉え、洞察へとつなげることを目的として、これまで赤十字活動に従事してきた、あるいは現在従事している関係者、ならびに赤十字に精通した方々との懇談会を開催した。懇談会では、インタビューを通じて参加者から多様な経験や考え、思いを伺うことができた。その内容について、以下のとおり報告書として整理する。懇談会で得られた非常に貴重な知見を今後の赤十字学構築の基盤として、引き続き検討を進めていく。

令和7年8月19日
学校法人日本赤十字学園 赤十字の教育研究推進委員会
赤十字学構築部会

Ⅱ 方法

1. 懇談会の日時と場所、参加者

懇談会のインタビューは2回実施した。第1回は令和6年8月27日、第2回は同年8月29日に行った。いずれも約2時間、日赤本社の会議室において対面形式で実施した。

懇談会の参加者は、これまで赤十字活動に従事してきた、あるいは現在従事している関係者、ならびに赤十字に精通している方々である。参加者数は第1回が8名、第2回が2名であった。これに加え、学園の富田理事長、赤十字の教育研究推進委員会の守田委員長、および赤十字学構築部会のメンバー2名がそれぞれ参加した。

2. 懇談会時のインタビューの手順、質問項目

参加者には、事前に赤十字の捉え方や実践時の意識、日赤と他組織の違い、活動や意識の歴史的変化、将来の存続理由や役割の変化について、さらに学園への期待や、今後の日赤と学園の関係における要望について、準備をお願いした。

懇談会当日は、事前に提示した項目に限定することなく、赤十字に関する幅広い意見や経験を自由に語り合えるよう、対話方式で進めた。

3. インタビューのまとめ方

インタビューは、参加者の許可を得てICレコーダーで録音した。録音したインタビュー内容を逐語録として起こし、精読した。その後、参加者の語りの中から「赤十字について」「赤十字活動について」「赤十字及び学園の将来について」の文脈に着目し、その内容を抽出してコード化した。語りはいずれも貴重な内容であったため、可能な限り原文に近い形でコード化を行った。コード化したものは、内容の類似性に基づいて整理し、サブカテゴリーとしてまとめた。さらに、類似するサブカテゴリーを統合し、抽象度を高めカテゴリーとした。

カテゴリー化した内容は、真実性を損なわないよう配慮したうえで懇談会参加者に提示し、確認を得た。また、報告書の内容（カテゴリーを含む）については、懇談会に参加した委員および赤十字学構築部会メンバー間で検討を行い、妥当性を確保した。

Ⅲ カテゴリー別の内容

1. カテゴリー1：赤十字とは

概要：【赤十字とは】では、①[赤十字の基本理念と行動規範である普遍的な赤十字の原則に基づき自主的主体的に行動する]、②[誰でも理解でき共感できる組織であり普遍的な価値観で活動が続ける]、③[人道を具現化する文化を醸成し人を育み続ける]、④[赤十字標章のもつ意味とその活動から培われた高い信頼]、のサブカテゴリーに分類された。

サブカテゴリー①〔赤十字の基本理念と行動規範である普遍的な赤十字の原則に基づき自主的主体的に行動する〕では、人道の原則、独立の原則（自主性・主体性）、相互理解、普遍性、そして赤十字と法との関連性等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字とは	①赤十字の基本理念と行動規範である普遍的な赤十字の原則に基づき自主的主体的に行動する	赤十字は人道の原則に集約されている。
		命を救う、苦痛を軽減する活動から人道の実現を目指している。
		人道の理念は赤十字そのものである。
		主語は、被災された方々、苦しんでいる人、困っている人である。
		人道の要はコーディネーションであり、繋ぐということ。
		赤十字の7原則に基づいて行動していくことの基本が、赤十字そのものである。
		（赤十字の）7原則の独立の原則では、その国の法律に従うが、常に国際赤十字・赤新月運動の諸原則にしたがって行動できるようその自主性を保たなければならない。国もやらなければ、何処もやらない手が届かないところをやるのが赤十字である。
		湾岸戦争の時、赤十字の自主性、独立性を生かし、日赤は政府からの要請としてではなく、ICRCの原則、要請に基づいて派遣した（事実がある）。
		赤十字を牽引してきたのは、自発的、主体性である。
		赤十字の7原則で行動していくことこそが互いを理解できる。
		赤十字は普遍性、ユニバーサリティを求めている。その行きつく先は命を大切に、人間の尊厳を守ること。
		赤十字が法を超えてできることが、法的にジュネーブ条約で確保されている。人道的イニシアチブ。
		赤十字は法治国家にある組織として法には従うが、我々は法を越えたものの大切さも忘れてはいない。法を越えたものとは人道である。
		日赤の特性に鑑み、その自主性は、尊重されなければならない（国民保護法、日本赤十字社法第3条）。国には日赤の人道的マインドを抑えることはしない。その特権を私たちは活用しているのかが、問われている。

- ②〔誰でも理解でき共感できる組織であり普遍的な価値観で活動が続ける〕では、誰でも理解でき共感できる組織である、や赤十字の価値や考え方は世界共通の価値観である、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字とは	②誰でも理解でき共感できる組織であり普遍的な価値観で活動が続ける	赤十字は活動する組織と研究する大学がある。
		誰でも理解でき、共感できる組織としてあり続けてきた。
		法律がそれ（組織の自主性、自律性）を保証してくれている。
		赤十字は何も変わらないものだ。
		世の中全体が他人のことを思いやって、自らが困っている人に手を差し伸べることができれば、究極的には、赤十字は不要になる（ビクトの言葉）。
		（赤十字は）組織体であり運動体であることを踏まえて赤十字の思い、考え方、理念を世の中に伝えていくためには、日赤が存続することは必要。
		赤十字は組織でありながらも運動体である。職員はその運動を支える一人である。
		地域におけるコミュニティの橋渡しになるのも（赤十字の）役割。
		人間は右手で戦争をして左手で赤十字を作って救っている。日赤には調査部があり、学園に研究機関があり、それが理想的な姿である。
		信頼性は大きい。自己完結という言葉のように、訓練されて、仕組化され、個々人が力を発揮する。
		共通の価値観で世界中が動いている。
		赤十字の価値、考え方は不変なものである。
		どのような変化があっても、赤十字の価値、活動、人々のそばにいる、その役割は変わらない。
		他者のために役立ちたいという気持ちを伝えていくことが日赤の大きな使命である。
		歴史の中から赤十字の遺産の価値を見ることはできる。
		いつの時代においても、めげないで赤十字の理想を赤十字運動として追求する。
		今の世界を見てみると、うまくいかない現状があるから、あえてこの時に夢物語のような理想を語ってもいいのが赤十字、みんなでやるのが赤十字。一緒にやりませんかというメッセージを発信していく役割がある。
		Being、存在が赤十字であり、それを追求する赤十字学という一つの理想を追求する姿である。

- ③〔人道を具現化する文化を醸成し人を育み続ける〕では、人道を実現する組織であり、人道は大事であることの文化を育てているや、人と人のかかわりの中で人を育む、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字とは	③人道を具現化する文化を醸成し人を育み続ける	人道を実現する民間の組織で、人道という人間らしさや人を大切にすることがどういうことか、それが大事であるという文化を育ててきた。
		一人ひとりの心の中にある優しい気持ちを具現化したものが赤十字である。
		民間人を攻撃してはならないとか、世界中がそれに対していけないことだと声が上がるとい文化を作ってきた。
		抑止力としてのヒューマニティ、文化を作ってきた。
		人が死ぬことは仕方ないと捉えるのではなく、助けなければと思うこと、人として暮らすとはどういうことか、人道の具体的な形は変容するそれを大切にすることを作ってきた。
		言葉なくして世界共通の言語たるのが赤十字である。
		（赤十字は）人間の文化にとって重要な側面となっている。
		青少年赤十字活動は、仲間とともに自分の変容、自分が成長していく。一人ひとりが自発的な意思を持って、何かしら貢献したいという気持ち、奉仕の気持ちになる。
		赤十字というのは、人を育てる、人を作る、そういった団体である。
		（赤十字の講習事業の）参加者には技術を万が一の時に自発的に人を救うことに役立ててもらう。自発的な意思に基づいて人が倒れていたら声をかけるところに繋がる。（助けたい）気持ちを表すためにはこういう（赤十字の講習の）技術、知識が必要である。

- ④〔赤十字標章のもつ意味とその活動から培われた高い信頼〕では、赤十字標章の信頼性、赤十字標章がもたらす人々への安心感、赤十字の活動から培われた信頼等、について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字とは	④赤十字標章のもつ意味とその活動から培われた高い信頼	赤十字のマークというか、信頼性は絶大。赤十字はマークを提示すれば、（被災地に）入っていける。
		現場に入って赤十字だと言えば話を聞いてくれた。
		赤十字の信頼性は、世界的なこれまでの赤十字の貢献、見える形で国民の方たちの信頼を得られるような仕事をしてきたからである。
		現地活動で、その（赤十字）マークを見たときの被災者の皆さんの薬をもうすぐするような眼（差し）。
		（被災地で）救護服の赤十字のマーク、ワッペンを見た時に泣き崩れられた。赤十字のマークの信頼性は今も昔も変わらない。
		多くの NPO、NGO が活動を拒否される事例があったが、赤十字のマークはいつの時代でも信頼をされている。
		単なるその標章の意味だけではなくて、人々の心を安心させる意味合いもある。
		総合力、ネットワークがある、世界的な組織である。（赤十字）マークの信頼性。自己完結で活動ができる団体である。
		訓練の中で赤十字のマークを目にしない時間帯はないくらい、赤十字の活動が行われている。



2. カテゴリー 2：赤十字の現状と課題

概要:【赤十字の現状と課題】では、①[人道危機に対する赤十字の在り方]、②[赤十字の基本原則の翻訳と正しい解釈]、③[赤十字の歴史を次世代に繋ぐ]、④[赤十字の使命を伝え成果を表す]、のサブカテゴリーに分類された。

①[人道危機に対する赤十字の在り方]では、赤十字の基本原則と国際人道法、赤十字の理念や原則が無視されている、等が語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字の現状と課題	①人道危機に対する赤十字の在り方	赤十字の原則、ジュネーヴ諸条約とかが全く守られていないが、心めげずに、しっかり普及をしていく。辛抱強く続けることが大事である。
		（原則に則り）活動していく中からお互いの理解が生まれ、平和に繋がっていく。
		赤十字として人間の連帯、隣人愛をこのような時代であっても死守して、存在感を持って社会にインパクトを与えて世論を、人々の心を変えていくような動きの核となる存在として位置付けられ、役割を果たす。
		赤十字の理念を正しく理解していない。
		国際社会で赤十字の理念、原則が無視されているが、日本の社会でもそういう現実があることを我々はもう少し危機感を持つべきである。
		公平性とか平等性を出して断る理由、やらない理由にしているか。
		ヒューマニタリアン・ワーカーが攻撃的となるなど、国際人道法違反の出来事が最大の関心事である。パレスチナ赤新月社のボランティアと、イスラエルのダビデの赤盾社のスタッフとボランティアが、赤十字活動中に殺害された。
		人道の実践をする人に制限がない移動、弱者に対するアプローチを確保し、安全を確保しなくてはならない。
		かつて守られていたことが今日ないがしろにされている。
		人道的価値観はどうなっているのか、心配である。
		ボランティアという言葉が奉仕という言葉に直したことにより、言われたことに対してやっていくイメージになっている。
		今や他の団体も当たり前に関与している。
		価値観として、他団体も人道という感覚はある。赤十字がこれまでに人道的概念を広く広めてきたことにより、当たり前のように市民にも浸透した。価値観の上で境界線が曖昧になってきている。

- ②〔赤十字の基本原則の翻訳と正しい解釈〕では、差別と区別の用語解釈や翻訳、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字の現状と課題	②赤十字の基本原則の翻訳と正しい解釈	区別なんですか、差別なんですかと。人によって、区別はすれど、差別はせずという言い方をする人がいる。
		区別はあくまでも苦痛の度合いに応じてということで、私たちの介入は差別しないと授業では教えている。
		私は区別だとずっとインプットされていて、今まで全部区別だと思ってきた。

- ③〔赤十字の歴史を次世代に繋ぐ〕では、赤十字の歴史を知らない次世代への伝承や赤十字の歴史は誇るべき証拠史料であり知恵袋である、等が語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字の現状と課題	③赤十字の歴史を次世代に繋ぐ	保護者も赤十字を知らないという世代になっている。伝統のある大学に入学できて知らずに入ってきている学生がいる。
		証拠史料を次の世代に継承していくことと（史料を）保存・管理し活用してもらう環境を作ることが課題で赤十字のメモリー、記憶の価値を高めるために、それを活用してもらえる先生方が必要である。
		次の世代、将来に対して赤十字の理想とノウハウと歴史的なことをどう繋いでいくか。
		歴史は終わったことではなく、次に生かせる先人たちの知恵であり、苦労から学ぶことが大いにある。
		赤十字の従軍看護婦の存在が全く頭にない世代、赤十字がオンリーワンで活動していたことを知らない世代が、赤十字マークに本質的な戦時活動を理解できなくなりがねない。
		赤十字の歴史は我々が誇るべき将来に対する知恵袋である。
		日赤は、戦時救護、結核の予防運動を事業として行っていたが、時代のニーズに合わせた形で終了してきた。

- ④〔赤十字の使命を伝え成果を表す〕では、人道の守護神としての責務、赤十字だからこそできる人道や活動の成果を表す、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字の現状と課題	④赤十字の使命を伝え成果を表す	赤十字が当然やるべきことをやったことに対して日本人から批判がある。平和な時代から、赤十字はどういう団体で、どういうミッションで活動しているのかを、国民に伝えていかなければならない。
		戦争は人間が作り出すもので、我々はどんな状況でも戦争の悲惨さには断固として反対する組織であることを明確に出してもいい。
		人々のレジリエンス、地域社会の強化が必要である。
		赤十字だからこそできる人道の守護者としての役割で責務である。
		時代のニーズに応じた日赤のチャレンジスピリッツ。時代のニーズを的確に捉え社会課題を踏まえた上で、その中の人道的諸課題を日赤としてはリソースを確保して進めていくことはこれからも変わらない。
		変わる、変える、は重要なキーワードである。成果は、数値的なものではないのではなく、何かが変わる、変える、ことができたかどうかが重要である。変わることを自体をアウトプットの指標としていいのではないか。
		災害救護、看護教育も含め、受益者（被災地の人々）や看護学生が、どう変わったか、若しくは楽になった、が重要である。



3. カテゴリー3：日本赤十字社の現状と課題

概要：【日本赤十字社の現状と課題】では、①[創立以来の先見の原則に基づき補助機関としての法的根拠をわかりやすく伝え理解や協力を得る]、②[先人たちが紡いできた活動の歴史から学び柔軟に創造的に組織を変革する]、③[特別なオンリーワンであり続けるために総合力を活かして試行錯誤しながら柔軟に現場主義を貫く]、④[赤十字の強みを活かしつつ競争ではなく他組織・団体と連携し役割分担をする]、のサブカテゴリーに分類された。

①[創立以来の先見の原則に基づき補助機関としての法的根拠をわかりやすく伝え理解や協力を得る]では、国の補助機関としての法的根拠の理解、国民の赤十字ミッションの理解と周知、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
日本赤十字社の現状と課題	①創立以来の先見の原則に基づき補助機関としての法的根拠をわかりやすく伝え理解や協力を得る	赤十字の歴史には、「法的根拠はなかったが」という記述が出てくる。日赤は先駆けて（先見）、その後法が整備され、行政や国は法的な根拠がないとやらない。赤十字はそこが違う。
		赤十字は間違いなく活動体であり、研究団体でない。
		国とか行政がやっていないものをニーズがあったら、それを赤十字が代わってやるという補助機関という理解を正しく理解していた人ばかりではなかったこともある。
		内部にいる人間も赤十字の基本原則、補助機関という位置付けをきちんと理解していないと、同じ現象に対しても行動する人、しない人、また、国がやるべき、など様々なロジックがあり、赤十字も簡単ではない。
		赤十字7原則を、活動を断る理由にする人もいる。
		災害を含む有事の際に我々のミッションを十全に達成するためには国民の意識を上げておかないと、我々のミッションすら障害が起きる可能性がある。
		攻めの広告を平和なうちからしておかないと、有事の時に非常に大きな障害に立ち向かう可能性がある。
		赤十字のマークというか、信頼性は絶大。NPOの方々のような草の根的な寄り添うような活動は、本来は赤十字のやることであるが、（現在の）医療救護班のような活動では信頼されているのに不満に繋がる場所がある。

- ②〔先人たちが紡いできた活動の歴史から学び柔軟に創造的に組織を変革する〕では、将来を見越した組織改革、先人たちの活動の歴史から学びつつ時代の変化に対応する、柔軟性と想像力・創造力、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
日本赤十字社の現状と課題	②先人たちが紡いできた活動の歴史から学び柔軟に創造的に組織を変革する	30年後、40年後に我々に対して先人たちがいいものを作ってくれたと言ってももらえるような今の時代に合った改革が必要である。
		赤十字のナレッジを生かし、赤十字だけでは対応できないことは他の団体と連携できないのかと考える。（赤十字は）今まで訓練してきたものしかやっていない。
		過去の成功は非常に大きいですが、時代の変化に対応した変化をしてこなかった。
		成功体験が組織としての形を作り、それが最適化（業務が細分化）されてきたが、細分化されたことで変化が生まれなくなった。
		赤十字は普遍的な価値をもっているが、事業の変化、拡大ができず、停滞から少し縮小傾向にある。今やっている事業のやり方等を見つめて変革を考える、精査していくことが必要になる。
		柔軟性に欠けるところもある。
		赤十字は大きな組織で細分化されているので動きづらく、スピード感がない。
		前例がないものに対して試行錯誤、柔軟な動きをして成果を出している。その成果は、人数よりも、そこに至るまでのプロセスが重要である。
		柔軟な考え方、柔軟な動き、力を出し合って、横連携をしながら補足したことを押さえていかないといけない。
		今までの歴史を検証した上で、（赤十字が）今の社会課題、社会状況の中で、何ができるか分析をして進めていくべきと考える。
		日赤という信頼性、大きな組織を使って解決していく。事象的なものだけではなく、その先にある根幹となる部分の解決は何なのかを取り組む。海外の赤十字社で取り組んでいることを参考に、人道的諸課題だけではなく、社会的課題に対しても、今後取り組みを進めていくかを検討していかなければならない。
		柔軟性、想像力が欠如し、困っている人のすぐそばに行かない、行っていない。困っている人のそばに行行って助けたという気持ちを起点として何か組み立てをすることが大事である。

- ③ [特別なオンリーワンであり続けるために総合力を活かして試行錯誤しながら柔軟に現場主義を貫く] では、赤十字が埋没しているや赤十字本来の姿、等について語られた。

カテゴリ	サブカテゴリ	コード（語りのまま）
日本赤十字社の現状と課題	③ 特別なオンリーワンであり続けるために総合力を活かして試行錯誤しながら柔軟に現場主義を貫く	赤十字事業が直面しているのはこの先どうなるのかわからない。人工血液の臨床テストが始まる、医療も経営が厳しい、赤十字がオンリーワンでやっていたことが、様々な団体が色々専門的なことを行ない、赤十字が埋没している。
		急性期（約1週間）しか医療救護は出ない。（赤十字は）地元の医療機関が復活したということでハンドオーバーしてきたが、避難所での避難生活や仮設住宅入居まではその後も続く。行政もできず、支援する団体が入っていくが、そこには赤十字はいない。
		地域コミュニティが崩壊し、地域コミュニティのNPO化（自分がやりたい事、楽しい、関心がある事だけをやっている）している。
		支部の指示ではなくて自らがニーズ調査をおこなった。（赤十字が）これから取り組むべき（こと）、もう一度取り組むべき（こと）決して先進的な事例ではなくて、ベーシックな部分を押さえた上で応用する風なことで地域における赤十字活動は行われてきた。段々と形骸化し、色々な問題を含んで、表面化しているところもある。
		NPOなども財源規模が小さいが、本来は赤十字がやるべきことを、行政と連携をして色々なことをやっている。
		職員一人ひとりが変わるためには、柔軟な対応をしようとするための訓練をしなければならない。上の階層自体も決まった仕事、決まったミッションとして与えてしまっ、柔軟な対応が難しくなっている。
		自発性、やる気のあるボランティアの方々に対して、赤十字の活動はこんなことがある、やりたいことは赤十字が繁いでいきますと職員が頑張らなくてはならない。
		NPOは、まず被災者、被災地に入って壊れた家の周りを見ながら、元気ですか、大丈夫ですか、どんなニーズがありますかをやって、その状況を行政に伝えたりしているが、我々（赤十字）はできていない。
		日赤は仕組み化が進み、想像力が欠如している。その理由の一つは被災者、困っている人のそばに行って、実態をみていないことである。困っている人のそばに行って、どうにかしてあげたいという気持ちを持つということが一番大事なことである。
		永続的に信頼を得ていくことは、我々の世代が国民の信頼に応えるような仕事（硬直化した仕事ではだめ）で、柔軟なことをしていくことが重要である。
		行政は、地元の被災者目線でのニーズ、困りごとを知りようがないが、行政の方に、何かニーズはありますかと聞いても話にならない。そういう状況をしっかり理解しなければいけない。

- ④〔赤十字の強みを活かしつつ競争ではなく他組織・団体と連携し役割分担をする〕では、過去の実績と蓄積したノウハウで強みに変えるや競争ではなく他組織・団体と連携する、等が語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
日本赤十字社の現状と課題	④赤十字の強みを活かしつつ競争ではなく他組織・団体と連携し役割分担をする	防災セミナーは新しい取り組みである。地区防災が重要視され、地区と地域にいるボランティア等から親和性が高いため、育てていかなければならない事業である。
		（生活支援として）トイレ、キッチン、ベッドは、（赤十字の）医療系の得意技とする発想としては正しく、是非定着させたい。
		永遠不滅の活動体、活動価値を実現するために、今の組織体をうまく活用していくということが重要である。
		東日本大震災時は、試行錯誤しながら、柔軟に対応し、行政も NPO も必要性を感じて赤十字がやったことは良かった。今は、細かい現場レベルでの柔軟な対応ができていない。
		過去の先輩方がやってきたことで信頼をされている。
		（過去の活動の）ノウハウや実績があるがそれが継承されていない。
		被災者支援、生活支援、生活再建支援は、赤十字の存在が出るが、その中で赤十字と赤十字以外（NPO は相互連携）に分かれてしまっている。起こるであろう大規模災害で、赤十字だけで支えられないため、長期的な被災者支援等について、赤十字と皆さん（他組織）と協力しなければならない。
		何をやっていくか、そのためにはどういうノウハウを蓄積するのか。競争するのではなくて、どう連携するのが大事である。
		役割分担をして、他団体と連携してやっていく感覚が必要。ブルーシート張りのノウハウが当たり前になっているが、一部の NPO が消防署とか自衛隊にレクチャーをし、一緒にやっているが、その中に（赤十字）が入っていない。
		赤十字が何故救急法の講習をやっていくのかを考えると、目の前の人を助けるためのノウハウであって、赤十字に共感してくださる方に身に付けてもらいたい。赤十字の救急法と消防の救急法のすみわけが必要である。
		スフィア基準は赤十字の関係者が作り上げたものののに、国内で教えているのは赤十字でない。

4. カテゴリー4：赤十字学園への期待

概要：【赤十字学園への期待】では、①[わかりやすい言葉で赤十字を説明でき人道を自分事として捉えられるように]、②[本社と学園との一体感をもち連携を強化する]、③[赤十字の理念や考え方を理解し行動できる看護職の育成]、④[研究者と実践者とのコラボレーション]、のサブカテゴリーに分類された。

- ①[わかりやすい言葉で赤十字を説明でき人道を自分事として捉えられるように]では、赤十字をわかりやすく語りかけて伝えるや人道を自分事としてとらえる、等が語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字学園への期待	①わかりやすい言葉で赤十字を説明でき人道を自分事として捉えられるように	赤十字学は科目ではあるが、現代社会の良心、善の結集体であるようなそういう学問として社会に存在感を示せるとよい。
		今の学生にいかに赤十字をわかってもらい、面白い（と思う）、自分事に落とし込めるのかを大事にして教えている。
		学生が自分の言葉で赤十字を説明できて、人道を自分事として捉えられるか、言語化することを大切にしている。
		赤十字をわかりやすく、面白いということを伝えたい。
		なるべくシンプルに、わかりやすく。
		人道を小難しく説明するのではなく、人道の意味とは命を守る、健康を守る、苦痛を軽減するという説明をする。
		人としては当たり前のこと、命を守るのは普通のこと（と伝える）。
		語りかけて、共感し、伝えてというルールがある。
		わかりやすい言葉でしっかりと。夢を語ってもいいんだ、理想を語ってもいいんだ。無理だと思うのではなく、みんなでやれば少しだけでも近づくんだった。自分が生まれてきた意味、役割がそこにある。
		幼稚園では赤十字のマークについて、良いことと良いことをさす印ですと、価値イメージが湧いてくる（ように話す）。
		青少年赤十字のバッジを付けていると悪いことをしない（という）。赤十字の価値観を役立てる。
		人道の敵を自分自身でまずは考え、そして何をすべきなのかを考え、行動に移す。気づき、考え、行動することを青少年赤十字では意図している。

- ②〔**本社と学園との一体感をもち連携を強化する**〕では、相互理解と一体感や人材育成における連携、等が語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字学園への期待	②本社と学園との一体感をもち連携を強化する	連携していけば（同じ理想と一緒に追求していく）生み出せる。
		それぞれに強さがあり、得意とするところを協力し合い、同じ理想を追求していく。
		法律上組織が分かれているが、もっと一体感があり、気楽に接することができればよい。
		相互理解の部分でどこかで壁を作っている気がする。
		親和性の高い研究成果の発表を長期的にやれば、大学が身近に感じられる。
		看護大学は教育機関なので、職員の能力アップや講習に事務職員も参加して何らかの資格が得られる形（があると良い）。
		各大学の教員が1年に1回位、赤十字事務職員に親和性の高い話題をオンラインや出前講座をやり、身近に感じてもらう（機会をつくる）。

- ③〔**赤十字の理念や考え方を理解し行動できる看護職の育成**〕では、看護師の人材育成と確保、赤十字看護師として、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字学園への期待	③赤十字の理念や考え方を理解し行動できる看護職の育成	若手看護師の離職が早い、高いことをいかにクリアするのか。看護学という学問としての人気が薄れてきている。大学は大学、日赤は日赤ではなく、連携をして、共同して進めていければ良い。
		学生が活動の場で一緒に活動し体験をするサイクルは出来やすい土壌を持っている。
		（赤十字の看護大学生は）赤十字に関して大学で勉強してきているので違うと考えている。
		見学者の感激の仕方や響くところが千差万別で宝である。赤十字の底力、活動の記録、過去の出来事を今の自分に繋げて感じている。
		赤十字看護師として他の病院でも働くにあたって、赤十字の考え方、理念は忘れないで欲しい。
		専門性を高める高等教育機関として存続させながらも、現場とのギャップをいかにして埋めていくというところを、今後期待する。

- ④〔研究者と実践者とのコラボレーション〕では、大学の教員である研究者と赤十字の実践者とのコラボレーションや研究者の特権、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字学園への期待	④研究者と実践者とのコラボレーション	研究者とのコラボ、自分たちができること、できないことをお互いに助け合っていく関係を構築し、より赤十字としての強さに繋げる。
		（学園は）日常業務では知り得ないところを、深堀することに期待している。
		組織の中、活動する中で出てくる課題を研究し、フィードバックする。
		リサーチ&ディプロップメント（R & D）の機関として国際人道研究センター（赤十字が抱える課題、世界の深刻な問題について考える）がある。
		過去の経験を通して、赤十字の未来のことを考える時間ができる。これは、教員、研究者の特権である。

5. カテゴリー5：赤十字を探究・研究する

概要：【赤十字を探究・研究する】では、①〔シンプルな赤十字のメッセージを裏付ける学術的な責任〕、②〔史料は赤十字の活動の証拠であり、過去から現在の検証そして未来への道標〕、③〔被爆国の赤十字社として研究を通してアピールする〕、④〔赤十字の原則の解釈と現場への還元〕、⑤〔未来につながる研究のデータベース化〕のサブカテゴリーに分類された。

- ①〔シンプルな赤十字のメッセージを裏付ける学術的な責任〕では、赤十字のメッセージ、メッセージの裏付けと学術的な責任、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字を探究・研究する	①シンプルな赤十字のメッセージを裏付ける学術的な責任	赤十字の研究というのは難しくしない方がいい。赤十字のメッセージは、研究しないとできないものなのかと誤解を与えるようなことはよくない。
		メッセージはできるだけシンプルであるべきで、裏打ちするようなきちんとした学術的な責任、赤十字としての見識、バックボーンとして持っている必要がある。
		人道や赤十字の理念は難しいものだという印象を与えるとしたら危険である。
		難しい理屈ばかりになってしまうと、普遍性を危険に陥れる。研究を進める上で研究の意味とは何かを分けて考えることが重要である。
		研究は大事で裏付けが必ずないと一般の人たちに根拠が伝わらない。

- ②[史料は赤十字の活動の証拠であり、過去から現在の検証そして未来への道標]では、史料は赤十字の活動の証拠、人道が伝わる研究と社会へのアピール、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字を探究・研究する	②史料は赤十字の活動の証拠であり、過去から現在の検証そして未来への道標	赤十字の理念、原則があっても現実はそのような部分がある。何故そうなったのかをもっと研究して、そうならないためにはどうしたらいいかを研究し普及する。
		史料は、赤十字の旗の下各施設で活動した証拠となる。
		史料の本物の力、活動の記録証拠の力（を活用する）。
		実は新しい事象はほとんどない。同じ問題、似たような事例があり、過去の記録をきちんとやっていくこと（残すこと）が重要である。
		日航機墜落事故が起きたが、全日空機墜石衝突事故の時のことと比較して準備しなかった。墜石の時のデータを出せということはやっていない。
		災害ってどういうことなのか、戦争になるってどういうことか、人の人道が保たれない、侵される状況はどういうことか、私たちの想像力というところにもアプローチしていく必要がある。
		世界でどういうことが起こっているのか、歴史の中でどういうことが今まであったのかをあぶり出し、見つめなおす。複雑になり過ぎない、けれども人道が伝わるような研究と社会に向けてのアピールが大事である。
		先人たちの努力の中で、今があることを振り返って考えることも重要である。現実をもっと掘り起こして、目指す赤十字を考えていく。

- ③[被爆国の赤十字社として研究を通してアピールする]では、世界の赤十字の中核として、世界の赤十字の課題、等が語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字を探究・研究する	③被爆国の赤十字社として研究を通してアピールする	核兵器の使用については、世界で唯一日本だけが経験した原爆の問題も含めて、核廃絶、平和の問題について、日赤は世界の赤十字の中で中核としてこの機能を維持していく、世界にアピールしていく普遍的な課題だと考える。
		人々が寄り添える世界運動として赤十字の存在をいかに発揮できるかが日赤だけでなく、世界の赤十字に問われている。

- ④〔赤十字の原則の解釈と現場への還元〕では、赤十字の原則の解釈、研究を現場へ還元する、等について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字を探究・研究する	④赤十字の原則の解釈と現場への還元	赤十字の原則の今の解釈をどうしたらよいかということ。現場で迷っている。判断を誤ると赤十字の向かうべき方向、特にその場の人や責任ある人たちによって変わってくる。（この点を）突き詰めて考えていきたい。
		赤十字はあくまで人の命を救うというプラクティショナーなので、研究成果は現場にフィードバックされていくものだと思っている。
		研究成果は現場に戻って、それが満たされて、現場の人たちに役立つものを目指している。
		プロセスの部分、ニーズや気持ちでどういうことをやって、そのためにこういうことをやったというプロセスの部分は重要。感覚ではなく、これは人のために役に立った、こういうプロセス、苦勞があったけれども、柔軟な発想とか既存の仕組みに捉われ考え方でやれたということ。

- ⑤〔未来につながる研究のデータベース化〕では、データベース化について語られた。

カテゴリー	サブカテゴリー	コード（語りのまま）
赤十字を探究・研究する	⑤未来につながる研究のデータベース化	新しい事例が出たときにこれと同じことがあった、その時どういう対応をしているのか。
		災害に限らず日赤が新しい事例が発生した時にデータベース化は役立つ。

Ⅳ まとめ

赤十字に関するインタビューでは、その根幹にある普遍的な原則に基づき、自主的・主体的に活動する組織としての姿が語られた。誰にでも理解でき、共感を得られる普遍的な価値観を持ち、人道を具現化する文化を育み、信頼を築いてきた点が強調されていた。一方で、人道危機における役割と基本原則の重要性、理念が時に十分尊重されない現状への懸念、原則の正しい解釈、歴史の継承、使命の発信といった課題も示された。日赤においては、国の補助機関としての法的根拠の理解促進、先人の歴史から学ぶ姿勢と柔軟な組織変革、総合力を生かした現場主義、他組織との連携の重要性が指摘された。赤十字学園に対しては、理念を分かりやすく伝え、人道を自分事として捉える人材育成、本社との連携強化、理念を理解し行動に移せる看護職の育成、研究者と実践者の協働への期待が寄せられた。また、赤十字を探究・研究することについては、メッセージの学術的裏付け、史料の活用、被爆国としての国際的なアピール、原則の解釈と現場への還元、未来につながる研究のデータベース化の重要性が語られた。

インタビューから示唆される今後の方向性として、赤十字学園としては、まず、赤十字の一員として、赤十字の普遍的な理念を改めて深く理解し、社会全体へ浸透させていくことが求められる。そのためには誰にでも分かりやすい言葉でその価値観を伝え、共感を広げることが重要である。過去の活動から学びつつ、社会の変化に柔軟に対応できる組織体制を構築し、独自の強みを生かしながら他の組織や団体との連携を強化し、それぞれの役割を明確にすることで、より効果的な活動が可能となる。また、単に知識を伝えるだけでなく、人道的な視点を持ち、それを自らの行動へとつなげられる人材育成が不可欠である。そのためには、座学と実践を結びつけ、学生が主体的に考え、行動できる教育が求められる。さらに、本社（病院）との連携を強化することで、現場のニーズを教育内容に反映させ、より実践的な学びを提供する必要がある。研究においては、赤十字の活動を学術的に裏付け、その意義を社会に広く発信していくことが重要である。過去の史料を分析し、得られた教訓を未来に活かすとともに、被爆国の赤十字社としての経験を踏まえ、国際社会における人道支援のあり方について積極的に提言していくことが期待される。さらに、研究成果をデータベース化し共有することで、今後の研究や実践に役立てる仕組みづくりも重要となる。

謝 辞

懇談会のインタビューにご協力いただいた皆様には、
本事業および冊子化へのご同意を賜り、誠にありがとうございました。
あわせてご支援・ご協力いただきましたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

赤十字に関する懇談会 報告書

2026年3月31日 発行

学校法人日本赤十字学園 赤十字の教育研究推進委員会

赤十字学構築部会

部会長	田 村 由 美	日本赤十字広島看護大学学長
副部会長	小 川 里 美	日本赤十字九州国際看護大学看護学部長
委 員	守 田 美奈子	日本赤十字看護大学学長
	山 本 美 紀	日本赤十字北海道看護大学看護学部長
	江 本 リ ナ	日本赤十字看護大学看護学部長
	伊 藤 明 子	日本赤十字豊田看護大学特命教授
	村 田 由 香	日本赤十字広島看護大学副学長
	大 場 武	法人本部学事部長
事務局	橋 爪 朋 子	法人本部学事課長

